

# 佐賀市 54 歴史探訪

## すぎ たに よう すけ つい じ はん しゃ ろ 杉谷雍助と築地反射炉

嘉永3(1850)年7月に起工された築地反射炉で始まった鉄製大砲の<sup>ちゆうぞう</sup>鑄造は、幾多の困難を乗り越えながら多大な成功を収めました。このプロジェクトチームには、蘭学者のほか、<sup>い も じ かたなかじ</sup>鑄物師や刀鍛冶など古くから日本に伝わる技術の職人も含まれていました。

今回、紹介する杉谷雍助は、こうした多彩なメンバーからなるチームでリーダーの本島<sup>もとしまとうだゆう</sup>藤太夫に次いで、技術的なチーフにあたった人物です。

杉谷<sup>ぶんせい</sup>雍助は、文政3年(1820)生まれで、<sup>こうどうかん</sup>藩校弘道館で学んだ後、長崎で蘭学を学び、さらに江戸に遊学して佐賀出身の蘭学者である伊東<sup>いとうげんぼく</sup>玄朴<sup>しょうせんどう</sup>の象先堂に入塾しました。その間、杉谷雍助は伊東玄朴らとともに鉄製大砲製造のテキストである『ロイク国立鉄製大砲鑄造所における鑄造法』(鉄砲全書)を翻訳しました。この翻訳によって、帰藩後の嘉永3年6月、杉谷雍助は新たに設置された鉄製鑄砲局に配属され、実際の大砲鑄造を手がけることになりました。

反射炉の中でいったん溶けた鉄が固まったり、思うように鉄が流れなかったり、第1回目の鑄造から14回目ようやく満足できるものが仕上がったようです。「此砲未タ西洋ニ及バザルアリト雖其相違ル事豈ニ遠カラシヤ」(この大砲はまだ西洋で造られたものには及ばないが、その差は決して遠いものではない)杉谷雍助は、こう書き記しています。

この後、佐賀藩での鉄製砲の鑄造は軌道に乗り、幕末の日本では最も成功した反射炉事業となりました。

安政4(1857)年には、幕府の要請により杉谷<sup>あんせい</sup>雍助は建設中の伊豆<sup>いず</sup><sup>にらやま</sup><sup>やま</sup>山反射炉の技術指導に派遣されています。

その後、杉谷雍助は、佐賀藩の造砲局主事に就任した後、慶応2(1866)年になくなり、墓所は佐賀市精町の泰長院にあります。



▲佐賀史跡「築地反射炉跡」



▲泰長院の杉谷雍助墓所

